

アフォーダンスとは何か

私は「観察」という行為は、人間が知的に向上していくためにとても大切なものだと思います。そして、観察をし続けることで、どちらが観察されているのかわからないような事態になることもあります。たとえば、生物学の一分野で動物行動学という学問分野がありますが、その分野のエキスパートで、ノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツという学者がいます。「ソロモンの指輪」（早川書房）という著書が日本では知られていますが、この本を読むと、ハイイロガンという鳥の観察をするために、孵化したばかりの幼鳥にローレンツがうなずいたところ、その幼鳥が彼を親だと認識して、一緒にベッドで寝るようになってしまいう話が出てきます。インプリンティング（刷り込み）という生物学的現象について書かれたものですが、観察にのめり込んでしまうと、思わぬ状況に踏み込むこともあるのですね。

さて、今回のテーマの「アフォーダンス」ですが、佐々木正人さんの「アフォーダンス入門」（講談社学術文庫）という本を読むと、その前半はずっと生物学の巨人といわれるチャールズ・ダーウィンの研究について書かれています。ダーウィンは南アメリカのガラパゴス諸島での観察から、進化論を唱えたことで知られていますが、彼自身は自分のことを地質学者と名乗ることが多かったと言われていました。佐々木さんの本に出てくるダーウィンの研究の話の一つ紹介しましょう。

ミミズは目や耳などの感覚器官はないけれど、光や音に反応しないわけではありません。全身が100~200の節からできていて、とても筋肉質な身体をしています。そんなミミズが自分の巣の穴を落葉でふさぐ様子をダーウィンは観察して、葉のどのようなところ（葉先なのか、柄のあるところなのか、真ん中なのか）をかじって穴に引き込むのかを研究しました。その結果、ミミズは気温や土の硬さなどに応じて、尖った葉先だったり、硬い柄の部分だったり、引き込む部分を使い分けているということ突き止めました。彼は、ミミズには知能があるという結論を下しました。

下等な生物は「刺激—反応」の組合せで行動していると思われがちですが、周辺環境から情報を得ながら考えて行動をしているのではないかというダーウィンの観察を、佐々木さんはアメリカの心理学者ジェームス・ギブソンの学説につなげます。ギブソンは環境が動物に与える意味をアフォーダンスと名付け、人間を含めた生物が環境とのやりとりの中で行為を生み出していることに注目しました。アフォーダンスはギブソンの造語で、英語の afford には「与える」「供給する」「うながす」などの意味があります。人間など特に高等な生物は、意図をもって行為をしていると一般に思われていますが、実は環境に行為を促されていることが多いのではないかというのが、アフォーダンスの考えの中核になります。

多くの人は、知能というのは脳の中であって、そこからの指示で行為が行われていると思っていますよね。でも、たとえば2次関数の問題を紙に書いて解けるとか、古典の教科書を読んでその現代語訳を言えるとか、何か対象（環境）があってはじめてその行為ができるとかできないとかかわるといえます。行為は環境に対する働きかけの結果として見ることができますが、逆にいえば環境にアフォードされて行為がみえるようになっているのです。